

李北滿の新国家建設の希求と現実 —解放後から 1955 年までを中心に—

池 山 一 男

はじめに

李北滿(1908-1959、本名は李福萬)は、マルクス主義を基本思想としてプロレタリア芸術活動・朝鮮共産党再建・民族独立などに携わった左翼活動家・著述家で、李炳宇・福田満・林田朝人などの別名を持つ。新聞・雑誌等で評論活動を行い、官憲の記録に度々登場するものの人物や活動については不明な点が多い。

1908年朝鮮に生まれ、商業学校を卒業後1924年に初来日した¹。日本の植民地支配からの解放前は、評論活動を軸に朝鮮プロレタリア芸術同盟東京支部・無産者社・労働階級社等に参加するとともに、朝鮮共産党再建活動によって数年間の獄中生活も経験した。日本では金斗鎔・金三奎らの在日朝鮮人活動家や、中野重治・服部之総らの日本人左翼評論家とも交流しつつ左翼系機関誌上に植民地朝鮮の実態を告発し、朝鮮経済史の論考なども発表した。生涯の著作は70以上を数える。

本稿は1945年の解放直前から、1954年末に「南北統一促進協議会」結成の動きが始まるまでの期間における活動について検討する。解放後の朝鮮半島は米ソ軍政期にあって、数多くの組織が設立された一方で消滅し、さまざまな思想や思惑があった人物による主導権争いが活発であった。李北滿も中道左派勢力の呂運亨や白南雲らの周辺で、左右合作による朝鮮民族の統一と独立国家の樹立を模索するも成就せず、朝鮮での活動に見切りをつけて活動の場を再び日本へと移した。日本では旧知の日本人や在日朝鮮人らと交流しながら主として事業を展開し、民族統一活動は1955年の再開まで数年を要した。解放後の左右(南北)対立の顕在化の中で、従前の左翼的な思想や活動からは距離を置き始めた時期でもあり、マルクス主義や共産主義に対する意識の変化についても考察したい。

朝鮮在住の時期は、解放後の国家について述べた論説や朝鮮経済史に関する著作があるものの、来日後についてはほぼ存在しないことから、思索の実態を明確に把握し難い。加えて李北滿に特化した先行研究も乏しく、管見ではあるものの出生から1945年までを記した拙稿²、および在日朝鮮人組織による朝鮮民族統一

国家の樹立を祈念して活動した1955年から死去までを記した拙稿³の他には、沈熙燦による論考⁴のみであり、特に再来日後から1955年までの情報はほぼ皆無と言ってよい。ここでは、在日朝鮮人による日本語新聞『朝鮮新聞』⁵、および韓国民主社会同盟の機関紙『統一と平和』⁶(以下:「経歴」)に死去の際に掲載された記事を軸にしつつ、著作も参照して可能な限りの検証を進める。

I. 朝鮮半島での動向

李北満は1937年10月に朝鮮新聞事件の起訴猶予⁷が確定した後の1938年に結婚した。翌年に北京に渡り、解放を青島で迎えた。『朝鮮新聞』には「(一九)四十五年まで華北青島にて商業を営む」⁸とある。その後1945年末に朝鮮半島に戻ったようである。

1. 華北朝鮮独立同盟

1930年代、朝鮮での弾圧を避けた朝鮮共産党員が中国に赴き、朝鮮人による民族活動や共産党活動が活発に展開された。1935年に「韓国民族革命党」が結成されたものの、右派民族主義者は「韓国光復運動団体連合会」を、左派連合は「朝鮮民族戦線連盟」を結成して、左右に分裂した。この朝鮮民族戦線連盟から抗日闘争の軍隊組織としての「朝鮮義勇隊」が1938年に組織され、中国共産党の指導により共産党軍の一部隊として活動した。1941年には抗日民族統一戦線の樹立を掲げた「華北朝鮮青年連合会」が山西省⁹で結成され、翌年には金科奉主席・韓斌副主席とした「華北朝鮮独立同盟」¹⁰へと改組したのに伴い、朝鮮義勇軍は独立同盟の別働部隊として活動した。独立同盟員は青島にもおり¹¹、終戦時青島にいた李北満も参加していたものと推測される。

日本の敗戦に伴い、同盟員幹部は1945年末に平壤に帰還した。1946年2月10日には韓斌ら幹部がソウル¹²を訪問し、歓迎会が挙行された。李北満は同盟員の一人として参席したことが報じられており¹³、解放後に李北満の名が登場する初めての事例である。

2. 白南雲との関係

李北満は朝鮮に戻った後、いくつかの新聞社に勤務しながら新聞や雑誌に作品を発表した。それらの活動においては、当時先進的かつ中心的な役割を担っていた白南雲と呂運亨との関係が特筆される。

白南雲(1894-1979)は東京商科大学在学中にマルクス主義の影響を受け、朝鮮に戻って朝鮮経済史を研究した。マルクスのアジアの生産様式について1933年

に『朝鮮社会経済史』を、1937年に『朝鮮封建社会経済史』をいずれも日本語で改造社から出版した。李北滿も1930年代に同様の研究していたことから、2人は意見交換などで交流していたものと思われる。解放後は北朝鮮建国に参加し、教育省・労働党中央委員・最高人民会議議長などを歴任した。

白南雲は解放直後、ソウルに「朝鮮学院」を設立し院長に就任した。これは社会民主主義・マルクス主義・自由主義・民族主義などを研究する組織で、米軍政下で左右対立を避けた学術団体として活動した。李北滿は、学院常任委員の「重要な人物」に挙げられており¹⁴、思想的な研究に当たったものと思われる。

前述の韓斌歓迎会が開かれる少し前に、白南雲を委員長とする「朝鮮独立同盟特別委員会」が設置された¹⁵。朝鮮史研究者方基中は白南雲と「緊密に関係」した「進歩的立場の知識人・文化人」¹⁶として、李北滿ら10名程度の会員を挙げている。また2月末には、独立同盟を政党組織へと改編した「朝鮮新民党」が結成され、白南雲はソウル支部委員長に就任した。ソウルの新民党は共産党活動を行わず、李北滿も先鋭化する朝鮮共産党には関わらなかった¹⁷。

1946年5月には白南雲を所長とする「民族文化研究所」が発足¹⁸し、白南雲の側近¹⁹として李北滿・安漠・李清源ら22人が名を連ねている。この研究所では「人文科学講座」を開催しており、李北滿は「李朝社会経済史」と「亜細亜式生産株式論」という2つの講座を、それぞれ2か月間担当することが広告されている²⁰。

この研究所が1946年7月に発行した『民族文化論文集』に、「李朝末葉の社会経済状態分析」²¹が掲載されている。これは李北滿が1936年に林田朝人名で発表した「李朝末葉の経済状態に関する若干の考察」を朝鮮語に翻訳した作品で、文末には十年間の学究的空白の記念碑として新しい出発とする旨を記していることから、中国に渡り再び朝鮮に戻るまでの間は、研究・執筆活動をしていなかったことが判る。この作品の多くの部分は1948年刊行の『李朝社会経済史研究』へと再編され、論考を更に深めた。その後、朝鮮独立同盟特別委員会は1946年7月に「南朝鮮新民党中央委員会」へと改称され、11月には朝鮮共産党の朴憲泳や朝鮮人民党の呂運亨らによって結成された「南朝鮮労働党」へと吸収された。

3. 呂運亨との関係

呂運亨は、解放前に「建国同盟」を設立するなど朝鮮半島の民主的統一国家樹立を目指した指導者である。朝鮮総督府政務総監からは、8月15日の玉音放送に先立つ同日早朝に行政権の委譲を打診された²²。その後、当日夜に発足した「朝鮮建国準備委員会」を経て、9月6日には「朝鮮人民共和国」の樹立を宣言した。

中道左派の立場から「朝鮮人民党」や「勤労人民党」などの結成、「南朝鮮労働党」委員長への就任(のち離党)など、統一国家建設の中心的な活動とともに、

南朝鮮において左右合作による統一運動を推進した。しかしながら米ソの占領当局から認められなかった上に、李承晩や右翼・朝鮮共産党系・左翼などの反対によって難航し、統一運動は成就することなく1947年には暗殺された。

呂運亨は白南雲とともに1946年4月には『中外新報』を、1946年5月には『独立新報』の刊行に携わった。いずれも「完全自主独立・統一政権樹立」を掲げた左翼系の新聞で、李北満は編集局次長や論説委員として参加した。『独立新報』創刊号には「民族文化建設と批判」という短文を寄せ、日帝残滓的文化であった過去から、民主主義的な新しい民族文化を創造しなければならないと述べている。他には1947年に書評を3つ掲載している。

1947年7月2日に「愛国婦女同盟」が中外新報社に対し、社屋を明け渡すように要求した。その際に「中外新報編集局次長 李北満」が応対したと報じられている²³。直後の19日に社長の呂運亨が暗殺され、8月13日には『中外新報』は無期停刊となった。

その後『新韓民報』に朝鮮民主化に関する論文を数回発表し、1947年10月上旬号の掲載を最後に、日本に渡ったものと思われる。「経歴」には「南朝鮮における米軍政と、右翼的派閥英雄主義に批判を加えると共に、南労党の極左、官僚独善主義に挑戦した。ソウルで遂に志を得ず一九四七年、単身東京へ移る」と記されている。

李北満は、呂運亨が「勤労人民党創立宣言」²⁴で示したような、民主主義のもとで主要産業・銀行の国有化を含む経済政策を取り入れた朝鮮の統一国家建設に共鳴し、活動を共にしていたのであろう。また呂運亨も新聞社の幹部として信頼を寄せていた。しかしながら呂運亨の死や左右陣営の独善的な態度と勢力争いに辟易し、『中外新報』の停刊なども重なって、朝鮮での活動に見切りをつけて脱出を図ったのであろう。

後に在日朝鮮人作家尹紫遠²⁵が1955年5月29日の日記²⁶に「呂運きょ先生の肖像画を李北満に渡した」と書いている。李北満が相当に感激したであろうことは想像に難くない。

なお1946年4月には、朝鮮文学の活性化を目指した『文学新聞』が創刊され、李北満は主筆に就任している。文学への回帰は20年ぶりでありながらも、活動実績はほぼなかった。

4. 1948年までの作品

[1] 1946年(昭和21年)

No	表 題	執筆日	所載・書誌	朝	未
54	民族文化建設と批判		『独立新報』5月1日	○	
55	李朝末葉の社会経済状態分析	1946.6.1	『民族文化 論文集』	○	
56	ソビエト経済の史的考察	1946.10.25	『新天地』11月号	○	
57	ソ連選挙法の特質	1946.11.28	『新天地』12月号	○	

[2] 1947年(昭和22年)

No	表 題	執筆日	所載・書誌	朝	未
58	新刊評「一般経済誌」		『独立新報』1月5日	○	
59	三十三人と統計表(上・中・下)		『独立新報』3月4～6日	○	
60	新刊評「農民と革命」		『独立新報』3月30日	○	
61	現下中国国共の動向	1947.4.29	『民主主義』19号	○	
62	朝鮮の民主化と日帝残滓肅清問題	1947.8.2	『新韓民報』8月中旬	○	
63	総選挙と朝鮮の民主化	1947.9.23	『新韓民報』10月上旬	○	

[3] 1948年(昭和23年)

No	表 題	執筆日	所載・書誌	朝	未
64	李朝社会経済史研究	1947.7.15	大成出版社[1948.2.25]	○	
65	社会科学大辞典(部分)		文友印書館	○	*

* No. は筆者による作品番号、執筆日は作品に記載の年月日、朝は朝鮮語による作品、未は筆者が内容を確認していない作品を示す。

この時期は朝鮮にいたことから、新聞・雑誌に朝鮮語で執筆した作品が多い。

No.54は『独立新報』創刊に相応しく、民主主義国家の建設とともに「日帝的文化」や「階位主義と権威主義」²⁷から脱し、新しい民族文化の建設が必要であるとする評論である。また『新天地』に2か月続けてソ連関連の論説(No56・57)を発表し、ソ連が1927年からの五か年計画により、帝政ロシアの時代と比較して長足の進歩を遂げたことや、社会主義国家の建設にあたって平等で公平な全階級の選挙が行われていることを論評している。解放前のように共産主義やマルクス主義を全面的に礼賛する論調は影を潜め、「共産主義の妖怪」²⁸などという表現も使用しながらも、ソ連の現状を好意的かつ冷静に報告している。

『新天地』は1946年1月に創刊された総合雑誌で、刊行当初は共産党活動などの社会運動が解禁された解放後の時代背景を反映して、林和や呂運享、あるいは

朝鮮共産党員等による左翼系の記事も多く掲載していた。初期の論調はソ連の政策を肯定的に評価し、今後の発展を期待するものが多い。一方で李北滿がNo.56・57のようなソ連を評価する論文を執筆することについては、共産党活動に否定的な解放後の行動から見た場合にはやや特異である。ソ連という共産主義国家と朝鮮で国家建設を目論む朝鮮共産党とは、異なる見解を持っていたのであろうか。

1947年には書評の他、植民地支配後の朝鮮が、日本支配時代の旧弊をどのように克服して民主的な選挙による国家を築いて行けばよいかを論じている(No.62・63)。米ソによる統治下の朝鮮において左右両陣営のどちら側を支持するかという政治的な問題ではなく、日帝の残滓を駆逐後に、民族の自立や民主的な国家建設とをどのようにして成し遂げるかを述べた論説で、南北の分断を危惧し真に民主的な国家を望んでいる。

No.64の『李朝社会経済史研究』は、朝鮮半島在住時の1947年に執筆された朝鮮経済史研究としての集大成と言うべき作品で、朝鮮における土地・税制・農業等についての経済史に関する400頁近い大作である。マルクスのアジアの生産様式を基に、朝鮮の土地所有や経済状況について、主として李王朝時代後半の経済的停滞性を中心に説明している。また李王朝の封建的停滞性を破壊し、資本主義様式を持ち込んだのは日本帝国主義であるとして、日本による経済的侵略という側面から朝鮮の植民地化および併合へと至る過程について考察している。日本の収奪や圧政を批判しつつも、日本と結託した朝鮮の支配階級やブルジョア層も批判している点が興味深い。序文では崔虎鎮²⁹・全錫淡³⁰・金漢周³¹らの民族文化研究所員に謝意を示すとともに、白南雲を「論著が現在まで朝鮮での最高水準を堅持」³²と称賛している。白南雲や研究所に対する好意的な態度が感じられる。

なお1945年12月に、林和や韓雪野などが参加して「朝鮮文学同盟」が発足した³³ものの、李北滿は参加していない。この同盟が朝鮮共産党系であったことから敬遠したのであろう。林和とはプロレタリアによる国家建設という共通の願望を抱いていたものの、共産主義を中心とした朝鮮半島の統一国家建設という理想と、左右両派による民族統一国家という理念に分岐した。

II. 左翼・共産党活動からの脱却

解放後の李北滿の行動には、それまでとは異なる共産党活動からの転換という大きな変化を感取できる。華北独立同盟への同盟員としての参加など、当初は共産党系の色彩を帯びた組織の構成員として活動をしていたようにも見えるものの、解放前とは異なり組織の中心的な存在ではなかったようである。また朝鮮の

独立などの理念には共鳴しつつも、独立同盟系の新民党や南朝鮮労働党などの政党を中心とした活動、もしくは朝鮮共産党を中心とした国家建設には参加せず、呂運亨や白南雲などと同調して行動していた。これらの行動を見ると、朝鮮共産党系の活動については早ければ中国在住の時期、遅くとも独立同盟のソウル訪問後には離れていたと思われる。

中国では、上海などの以前から朝鮮共産党が活動していた地域ではなく、租界であった天津や日本軍が支配した青島において、おそらくは日本や朝鮮との貿易事業を順調に営んでいた。左翼思想団体の幹部を歴任し、朝鮮共産党再建活動などによってある程度は名の知られた存在であった李北滿が、日本の影響下にある地域で官憲に監視されかねない非合法の共産党活動を継続することは考えにくく、加えて解放後の朝鮮における対立を目の当たりにして左右両派ともに敬遠した結果、従来のような朝鮮共産党活動からは離脱したのではなかったかと推察する。なおこの点については、今後も十分な検討を要する。

では解放後は何を目指していたのであろうか。思想的にはマルクス主義を根底に置きながらも、統一を志向する過程においては民族主義的意識を保持しつつ、左右両極に大きく偏ることのない中道的な立場からの民主主義的な統一国家を目指した。一方では企業や金融の国有化などの社会主義的な経済政策にも理解を示しており、ここには呂運亨の影響も色濃く反映していたであろう。このような態度は後に幹部を務めた「韓国民主社会同盟」の基本的な方針でもあった「民主社会主義的な革新勢力を発展強化」³⁴にも通じるものであった。中国在住時代に中立的統一にまで考えが及んでいたかについてははっきり判らないものの、朝鮮半島に戻った後の金日成による労働党政権、あるいは李承晩による親米ブルジョア政権を見たことによって、左右両派「南北両国」のいずれにもよらない統一を強く希望するようになったのであろう。しかしながら「ソウルで遂に志を得ず」³⁵朝鮮半島を去り、再び日本に活動の場を移したのである。

Ⅲ. 再来日後の活動 (1954 年まで)

1947 年秋に単身再来日し、1954 年末の南北統一促進協議会に関わるまでの期間については、『朝鮮新聞』・「経歴」に概略が記されているのみである。来日後も事業を展開して収益を上げていたらしいこと、また講座派の重鎮で、李北滿が 1930 年代に『歴史科学』誌にアジアの生産様式を投稿した際に教を請うた服部之総や、プロレタリア評論家・小説家中野重治らとの交流があったことが記されている程度である。ここではいくつかの文献にある情報を列挙し、可能な限り検証したい。

1. 『国際タイムス』と福田商会

李北満は来日直後に『国際タイムス』の編集局長に就任した。この新聞は1946年4月に設立された「朝鮮国際タイムス社」が創刊した日刊紙で、朝鮮の独立、日本の民主化への貢献、日本と朝鮮両民族の提携と協調などを掲げて日本語で発行された。同社が1948年1月に新聞検閲局に提出した報告書には、編集局長として「李炳宇」と記されている。

一方1948年12月には、日本共産党系の文芸雑誌『文化革命』に「朝鮮の文化界」³⁶が李炳宇名で発表されている。これは須山計一が『朝鮮新聞』に「わたしを通じて李炳宇の名前で……かいてもらってのせた」と記していることから、この李炳宇については李北満で間違いない。「李炳宇」はこの時期以外に使用しておらず、戦前の活動や逮捕歴から再来日時時の密入国が露見することを恐れて「李北満」の使用を避けたのであろう。

また『朝鮮新聞』には、『国際タイムス』廃刊後の1948年に自身の会社である「福田商会」（業種・業態等は不明）を、当時著名な三信ビル³⁷に構えたとある。ただしこのビルは1950年6月までGHQに接収されていたため、福田商会の事務所はそれ以降にあったことになる。

2. 齋藤茂吉の箱根の別荘

李北満が死去した17年後の1976年に、中野重治が李北満を回想して「李は……箱根の齋藤茂吉の別荘を占拠し、居座った」と語ったと記されている³⁸。

茂吉は戦前から箱根の強羅に別荘を所有³⁹しており、避暑の際に利用していた。戦後は疎開から帰京後の1948-50年に、二男宗吉（北杜夫）と出かけた。

1949年夏には別荘が「韓国人に占領されて思わぬ苦勞」⁴⁰をした。この「韓国人」については、北杜夫が1950年7月29日の日記に「北朝鮮軍ずっと圧迫をつづく。父は……F氏のことばかり気にして…」と書き、後年「註。F氏とは母屋を無断で借りていた一家…」⁴¹と付記した人物で、齋藤茂吉の日記⁴²に「福田満」で登場する李北満である。ただし李北満がどのような経緯で茂吉の別荘を知り、「占領」できたのかについては不明である。

「福田」は1949・50年の2年間に計40回ほど登場し、貸すことにした後も家賃滞納などには不愉快ながらも、茂吉一家と李北満夫妻との良好な関係が記されている。北杜夫は当時「おだやかな信用のおける人」⁴³・「紳士のような大丈夫」⁴⁴と評している。

その後1950年9月までには退去することとしたものの、尹紫遠が翌年2月28日に「箱根の李北満の家」を訪ねたと日記に書いていることから、その頃までは住んだのであろう。

北杜夫は翌 1951 年のこととして「F 氏はいつの間にか逐電していた。家賃のみならず強羅駅前の商店のツケを踏み倒した」⁴⁵と書いており、李北滿はこの年に退去したものと思われる。なお「経歴」によれば、朝鮮戦争の際に長男を釜山から脱出させて日本に連れてきたとあることから、「逐電」にはそのような理由があった可能性がある。

北杜夫は前記「註」で「F 氏は北朝鮮のスパイとわかり、新聞に報道された」⁴⁶とも書いている。これは 1955 年のいわゆる「第 3 次北朝鮮スパイ事件」で、北朝鮮スパイ団の首領と見なされて逮捕された件である。また茂吉は服部之総にも箱根で投薬や診察をしたと記しており、戦後の李北滿と服部之総との関わりを知ることができる文献である。

IV. 日本での思想行動と 1948 年から 49 年までの作品

李北滿は、解放後は朝鮮半島にいた頃から朝鮮共産党の活動には関わらず、また再来日後は日本共産党とも関わりを持たなかった。日本共産党には在日朝鮮人グループに旧知の金天海や金斗鎔⁴⁷が、また党员として戦後も交流があった蔵原惟人や中野重治らがいたものの、彼らと共産党活動をしたことは確認できない。

また、戦後日本で組織された在日本朝鮮人連盟(朝連)にも参加した様子は見られない。一方では、李承晩政権の態度が朝鮮半島の平和的統一を阻害しているとして、在日本朝鮮居留民団(民団)にも関係することはなかった。激しく対立していた在日朝鮮人団体の対立構造に身を置くことを避け、両団体が関係する政治的な活動にも関わらなかった。このような態度が、後に左右どちらにも依らないとした統一活動へと繋がっていった。白南雲や呂運亨が考えていた社会民主主義の理念による中道路線を、再来日後も保持していたと言えよう。

李北滿は再来日の際、左翼思想に基づく行動をしようとする意欲を持っていたのであろうか。朝鮮では左右(南北)の葛藤または同一地域内での思想的立場の対立を目の当たりにして、統一の動きに関しても具体的な進展を見ることはできなかった。呂運亨による朝鮮半島統一の理念に共鳴していた李北滿としては、空虚感に覆われた再来日だったと考えられる。その結果として再来日後は、思想的・政治的な活動からは離れ、事業に活路を見出したのであろう。

再来日後のこの時期の著作は、李炳宇の名で執筆した「朝鮮の文化界」のみである。この作品では朝鮮半島における解放後の芸術活動を概観しつつ、北朝鮮における教育施設の充実や文盲対策、および芸術活動の充実ぶりについて、韓国側の抑圧的な政策による文化活動の衰退との比較対象を述べ、「北朝鮮における輝かしい民主民族文化の発展と、南朝鮮に於けるその萎縮が見られ、これは今後

ますます甚だしい懸隔として現れるであろう」⁴⁸と結んでいる。発行元が日本共産党系で初代理事長が中野重治であったことから、北朝鮮を評価し韓国を否定する内容としたのであろうか。その後は同誌への掲載とともに、組織的な活動を再開する 1954 年後半までの間の著作は確認されていない。

[4] 1949 年 (昭和 24 年)

No	表 題	作品記載日	所載・書誌	朝	未
65	朝鮮の文化界 [筆名は李炳宇]	1948.8.29	『文化革命』11 月 25 日		

おわりに

解放後の李北満は従前と異なり、共産党あるいは北朝鮮を志向する思想的な活動や、米ソの影響を背景とした政治的な活動および権力争いなどには、全くと言っていいほど主体的に関わらなかった。ソビエトや中国共産党を肯定的に評価する評論を数点書いてはいたものの、北朝鮮に渡った金斗鎔や林和らのように、活発な左翼的活動をするかつての同志とは一線を画していた。ただし、共産主義的な活動から離れることとなった本質的な理由については、判らない部分が多い。事業に専念するあまり政治的な活動から遠ざかっていたのか、あるいは左右両派の組織や対立に不満を感じていたのか、本人の考えを知る著作がないことから、真意については不明である。この頃の朝鮮半島は戦争の勃発もあって、南北対立が好転する要素を見出すことはできそうになく、忸怩たる思いでいたことは想像に難くない。共産主義からの明確な転向でもなく、また民団や朝連等の組織に参加することなく、事業をしながら日本人や在日朝鮮人との交流を深めるといった、戦前とは全く異なった行動の様相を示していることについては、非常に興味深い変化である。

マルクス主義に傾倒し、プロレタリア革命による国家建設を願って活動してきた李北満にとって、解放後の独立同盟や朝鮮共産党はどのように映ったのであろうか。仮に中国在住時に共産党活動から離れていたとしても、帰国後の朝鮮においてプロレタリア革命による共産党政権の可能性を見いだせたのであれば、おそらくは賛同し、再び自身が活躍できる場を取り戻すことができたはずである。しかし、解放後の朝鮮の現実、宿願であった植民地から解放はされたものの、理想としていたプロレタリア国家でも、また民族統一国家でもなかった。支配の主体は変化したものの、相変わらず外国からの干渉も外国への依存も存在し、政治権力の主導権争いが絶えなかった。南北分断国家の成立や戦争により、民族の分裂が決定的な状況となったことによって、以前あれほどまでに願っていた統一が叶

わなない現実に失望したのであろう。

その後 1954 年になると、それまで祖国統一活動ができなかった鬱憤を晴らすかのように、朝鮮半島統一という理念のために再び精力的に活動する李北滿が戻ってくる。祖国の平和的な統一と、在日朝鮮人間に生じていた左右の対立を克服すべく、人生最後の活動へと向かっていったのである。

注

- 1 生年や初来日などの時期については諸説あり、本稿では筆者の見解による。
- 2 拙稿「プロレタリア活動家・李北滿の生涯と著作 - 人物像と 1945 年までの活動を中心に -」『同志社グローバルスタディーズ Vol.13』(2023),183-198.
- 3 拙稿「李北滿の解放後の活動 - 統協・民社同での活動について -」『在日朝鮮人史研究』No.53(緑蔭書房,2023),75-94.
- 4 沈熙燦「帝国日本のマルクス主義と植民地朝鮮—福本和夫、講座派、そして李北滿」『日本思想史研究会会報』第 38 号(2022),71-89.
- 5 「李北滿氏逝去」および須山計一「温い手の思い出」『朝鮮新聞』1959 年 3 月 1 日,2.
- 6 「同志李北滿の経歴」『統一と平和』1959 年 3 月 21 日.
- 7 『思想月報』第 43 号(1938),335.
- 8 前掲「李北滿氏逝去」および須山計一「温い手の思い出」.
- 9 ここには主に華北で活動した、中国共産党指導下の国民革命軍第八路軍(第十八集団軍)の司令部があった。
- 10 この部分および華北朝鮮独立同盟については、姜萬吉(太田修・庵途由香訳)『朝鮮民族解放運動の歴史』(法政大学出版社,2005)を参照した。また権寧俊「朝鮮人共産主義運動と中国共産党の対朝鮮人政策」『国際地域研究論集』第 1 卷(2010)・森川展昭「朝鮮独立同盟の成立と活動について」『朝鮮民族運動史研究』第 1 号(1984)・鐸木昌之「忘れられた共産主義者—華北朝鮮 独立同盟を中心に—」『法学研究』第 57 卷第 4 号(1984)・韓洪九「華北朝鮮独立同盟の組織と活動」『青丘学術論集』第 1 集(1991)なども参考にした。
- 11 前掲「華北朝鮮独立同盟の組織と活動」,150.
- 12 本稿では植民地時代の「京城」について、解放後は「ソウル」と記す。
- 13 「各界人士四百名参席」『朝鮮日報』1946 年 2 月 12 日,2.
- 14 方基中『韓国近現代思想史研究』(韓国:歴史批評社,1992),229. 李北滿と白南雲との関係は主に同書に拠る。
- 15 「独同特別委員会設置」『嶺南日報』1946 年 2 月 8 日,1.
- 16 前掲『韓国近現代思想史研究』,257.
- 17 「白南雲の側近で共産党に特に批判的だった李北滿」(上掲,311)とある。
- 18 『ソウル新聞』1946 年 5 月 7 日,2.
- 19 前掲『韓国近現代思想史研究』,259.
- 20 「人文科学講座 第二期聴講生募集」『独立新報』1946 年 11 月 23 日,1 および「第六期人文科学講座 聴講生募集」『独立新報』1947 年 8 月 6 日,1.
- 21 李北滿「李朝末葉の社会経済状態分析」『民族文化 論文集』(1946 年 7 月),58-90.
- 22 森田芳夫『朝鮮終戦の記録』(巖南堂書店,1964),67-71. 同書に拠れば呂運亨は、午前 6 時半に遠藤柳作政務総監の官邸を訪れた。
- 23 「中外新報に明渡令?」『朝鮮中央日報』1947 年 7 月 3 日をはじめとして、『自由新報』・『独立新報』・『中央新聞』・『家政新聞』等が前後して報道している。
- 24 「勤労人民党創立宣言」『民報』1947 年 4 月 27 日,1.
- 25 尹紫遠は国際タイムス社関連の仕事をしており、金素雲・金達寿らとともに交流があった人物である。尹紫遠の経歴・業績については、宋恵媛「尹紫遠日記を読む」『アジア太平

- 洋レビュー』17号(2020,49-64)を参照。
- 26 大阪公立大学宋恵媛氏から尹紫遠の日記をご提供いただいた。全文は、尹紫遠・宋恵媛『越境の在日朝鮮人作家尹紫遠の日記が伝えること』(琥珀書房,2022)。
 - 27 李北満「民族文化建設と批判」『独立新報』1946年5月1日,4.
 - 28 李北満「ソビエト経済の史的考察」『新天地』11月号(1946),74.この語は「共産党主義の妖怪」として『共産党宣言』に記されている[マルクス・エンゲルス(司法大臣官房秘書課訳)『共産党宣言』(1925),1]。
 - 29 崔虎鎮(1914～2010)、経済学者。1941年九州帝国大学卒業、ソウル大・東国大・延世大教授などを歴任。代表作が『近代韓国経済史研究』で、李北満は『李朝社会経済史研究』でしばしば引用している。
 - 30 全錫淡(1916～?)、経済学者。1945年に京城商業専門学校教授・国民大・東国大教授を歴任、北朝鮮に渡った後は金日成総合大学・人民経済大教授に就いた。
 - 31 金漢周(1913～?)、経済学者。法政大学卒業後、東亜日報記者・ソウル大教授。1948年北朝鮮に渡り金日成大学教授・科学院委員などを歴任。
 - 32 前掲『李朝社会経済史研究』,2.
 - 33 「文学同盟の新しい陣容決定」『自由新聞』1945年12月15日,2.
 - 34 「同盟の進路を明示」『統一と平和』1959年6月21日,1.
 - 35 前掲「経歴」.
 - 36 李炳宇「朝鮮の文化界」『文化革命』第1号(1948),59-66.
 - 37 現在の東京都千代田区有楽町1-1-2東京ミッドタウン日比谷。戦後は1945年9月～1950年6月までGHQに接収されていた[佐藤洋一『図説 占領下の東京』(河出書房新社,2006),129.]
 - 38 松尾尊兌『中野重治訪問記』(岩波書店,1999),159-160.
 - 39 「斎藤茂吉記念館」学芸員佐藤結子氏によれば、別荘は神奈川県足柄下郡箱根町強羅字向山1320-317(現在の住居表示)にあった。
 - 40 山上次郎『斎藤茂吉の生涯』(文藝春秋,1974),583.
 - 41 北杜夫『或る青春の日記』(中央公論社,1992),493-494.
 - 42 斎藤茂吉『斎藤茂吉全集』第32巻(岩波書店,1975).
 - 43 前掲『或る青春の日記』,493-494.
 - 44 北杜夫『茂吉晩年』(岩波書店,1988),176.
 - 45 上掲,197.
 - 46 前掲『或る青春の日記』,494.
 - 47 金斗鎔は1947年10月(1948年11月説もある)に北朝鮮へ行ったため、再会していなかったと思われる。
 - 48 前掲「朝鮮の文化界」,61.

Abstract

Lee Buk-man 's Desire and Reality of New State Building

—Activities after liberation and actions after returning to Japan—

Kazuo IKEYAMA

Lee Buk-man (1908-1959) was a left-wing activist and writer who was involved in proletarian artistic activities, the reconstruction of the Communist Party of Korea, and national independence. Although he was active as a critique mainly in newspapers and magazines, and often appears in the records of the government due to his left-wing words and actions, there are many unclear points about his people and activities.

Born in Korea, he first came to Japan in 1924 after graduating from a commercial school. Before liberation, he was active in left-wing criticism, participated in left-wing groups and published reviews, and spent several years in prison for the reconstruction of the Communist Party of Korea. In Japan, he interacted with Koreans in Japan and Japan leftists. He denounced the actual situation of colonial Korea and also published essays on the economic history of Korea. He has written more than 70 books during his lifetime. This paper examines Lee's activities, thoughts, and works from 1945 to the end of 1954.

Lee Buk-man met the end of the war in China and returned to the Korean Peninsula at the end of 1945. In the post-war chaos of the Korean Peninsula, he worked as a center-left force organization and aimed to unify the Chosan people and establish an independent state through left-right collaboration. After returning to Korea, he worked for several newspapers and published his work in newspapers and magazines. In 1946, he worked as an aide at the MINZOKU BUNKA KENKYUJO (Institute of Ethnoculture) at Peak Nam-un, where he studied the economy of the Yi dynasty. At Yo Un-Hyung's newspaper, Lee Buk-man became deputy editor-in-chief.

He hoped for the unification of the Korean Peninsula, but was not successful, so he returned to Japan in 1947. In Japan, he mainly developed his business

while interacting with Japan people he had known for a long time and Koreans living in Japan.

After coming to Japan, he became a chief editor of The Kokusai Times and ran that company. It was around this time that he remarried and lived in Saito Mokichi's villa in Hakone.

Lee Buk-man wished for a proletarian revolution. However, after World War II, the Morning Mosque was under the control of the United States and the Soviet Union. I was disappointed that it was neither the ideal proletarian state nor the national unity state. After coming to Japan, he worked without any affiliation with the Communist Party. He did not engage in any significant activities until 1954. It was in 1955 that the movement for the unification of the country began.